

その夜は、天幕の一つに寝台をあてがわれた。フソリテスからは、塔内の一室を勧められたが、断った。ワドワクスは、塔内にいるようだった——おそらくはドウィータとともに。思えば、カケトカゲに乗って水晶山の麓を脱出して以来、彼の顔を見ていない。

夜になると、フソリテスの塔およびその周辺の状況が、だいたい把握できてきた。

フソリテスが率いる蛇神崇拝者ヘクロノミの中核構成員——彼らは人々に「ヘクロンの騎士」と呼ばれていた——は、フソリテスとムーレグ、そしてまだ会ったことのないムーレグの兄を含めて、現在十五名。そのうち、五名が女だった——ドウィータを含めて。あとから加わった者もいるが、ほとんどが、昔からフソリテス家に縁のある者たちであり、これまでずっと蛇神崇拝ヘクロノムを司るために共同生活をしていたという。もともとは三十名以上いたのだが、ここ数日の間に行なわれた水晶山への攻撃で、半分が命を落としたという。

塔は、単なるフソリテスたちの住居ではなく、見張りの塔でもなかった。内部ほとんどすべてに夥しい数の書が詰まった巨大な図書館——地上界でも数少ない知恵の蔵だった。

彼ら蛇神崇拝者の務めは、朝、昼、晩の礼拝。そして、その他の時間は、塔内の書によって、ヘクロン神とこの地上界の歴史について学ぶことに費やされた。

そして同時に、剣の訓練もまた、行なわれていた。ムーレグによると、剣術の訓練が行なわれるようになったのは、ほんの数年前ほど以前かららしい。マトスがテジンの都で事件を起こしてからだ。

現在、塔の周辺で天幕を張って寝食を共にしているのは、今日になって新たに私とともに牢獄から救出された囚われ人たちをあわせて百三十人あまり。

彼らの面倒を見ているのは、やはり一度は「蛟漿」こうしやうを求めて水晶山へ向かい、フソリテスらに助けられた者たちであった。出身地は北はアツギスから南はククトランまで、東はニムランドウから西はセルシエンまで、各地に渡っていた。

彼らを指揮する中心となっているのが、私も顔を合わせた小人族の女性、フドーニだった。彼女の片脚が不自由だった夫は、行方知れずだという。しかし、彼女はそんな

な我が身の不幸はかけらも見せず、気丈に切り盛りしていた。私も、かつての衛士くずれだ。応急処置程度ならば、多少の心得があつた。彼らに混じり、看護の手助けをしているうちに、あつという間に陽は傾き、夜の帳が降りた。

その夜は、硬い寝台の上で輾転反側し、なかなか寝付くことができなかった。それでも夜半を過ぎ、ようやくうつらうつらし始めたとき、はつと眼が覚めた。何者かの近づく気配。無意識に剣を引き寄せた。右手で柄を握っていた。

「僕です。起きてますか？」

ワドワクスの声だつた。

「ああ、入ってくれ」

私は答えた。枕元の蝋燭に、火口箱から火を付けた。

ワドワクスが入ってきた。まつさらな白い長衣を着ていた。

「すみません。起こしてしまいましたか？」

「いや、眠れなかつた」

「僕もです」

ワドワクスは片手に陶製の瓶を持っていた。

「部屋にあつたので、くすねてきました。藍火酒です。こんな高価なお酒、今まで瓶を見たことさえありませんでしたよ」

よく見ると、ワドワクスはすでに少し呑んでいるようだ。頬が赤らんでいた。

「眠れないのかね？」

「不思議だと思いませんか？ 僕たちは、ドウィータを探して遙々ここまで旅してきました。やっと彼女に——ドウィータに巡り会えて、心休まるはずじゃありませんか。なのに、眠りの神ピローサは、夜の神クオナースはどこに行ってしまったんです？」

「かなり酔っているようだな」

私は彼から瓶を取り上げた。まだ瓶には三分の二ほど藍火酒が残っていた。香りから察するに、かなり上質で高価なもののはずだ。

私は藍火酒を口に含み、舌で転がした。見事な香り。飲み込むのが惜しいほどだ。が、飲み下した。甘美な液体が熱気とともに喉を流れ下っていく。胃の腑に広がる。上物だ。

「ねえゴルカンさん」

ワドワクスがじろりと私を見た。その眼が早々と据わっている。

「こんないい酒なのに、ずいぶんともつたいない呑み方をしたみたいだな」

「そんなことは訊いてません。ゴルカンさん。どうするつもりです、これから?」
突っかかるような問いかけだった。

「これから、とは?」

私はもう一口藍火酒を呑んだ。

「わかっているでしょう? いつ、サンナ村に帰るんですか?」

「誰がそんなことを? 私は、残る」

「あなたの役目は終わったと思います」

「言っている意味がわからないが」

私は瓶をワドワクスに突き出した。ワドワクスは受け取り、あおった。が、すぐに激しく咳き込んだ。呼吸を整えると、彼は言った。

「わかりませんか? 僕があなたをサンナ村から連れ出して旅に巻き込んだのは、ドウィータを見つけるためです。そして、彼女はもう見つかりました」

「誤解しているようだ。私は私の意志でサンナ村を出て、あんたと一緒にここまで来た。今、大事なのは、ジエクとトレアンダを救うこと。そして、マトスの企みを阻止することだ。私はもうどつぷりとこの事件に関わっている。四年前には尻尾を巻いて逃げ出したが、今の私にはもう、眼をそらして逃げることは許されない」

「しかしゴルカンさん、あなたをそもそも巻き込んだのは、僕です。サンナ村を出てから今日まで助けていただいた……謝礼はお支払いたします」

「謝礼?」

思わず、強い声を発していた。ワドワクスから瓶を奪い、藍火酒を一口飲み干した。

「今の言葉はひどい侮辱だ。が、酒精があんたに心ならずも吐かせた世迷い言として、聞き流しておく。いいか、ワドワクス。私はあんたに雇われた覚えはない。ドウィータの存在も関係ない。それよりも、あんたたちこそ、どうなんだ?」

「と言つと……」

気圧された表情でワドワクスが尋ねた。

「あんたはドウィータを見つけ出すのが目的だったんだろう? その目的は果たした。二人でブレジクの学舎まなびやへ帰ればいい。子どもたちやセイロウ爺さんが待っている」

「ゴルカンさん……僕は……」

「あんたに帰ることができないなら、私にもできないんだ」

私は藍火酒の瓶を寝台の脇に置いた。

「塔に戻って休むんだな。眠れないなら、酒じゃなく、塔内の書物を手にすればいい。あの塔は巨大な図書室なのだろう？ この地上のあらゆる歴史と知恵と知識が詰まっているそうじゃないか。あんたにとつて、興味深い書が数えきれないほどあると思うが」

うなだれた様子で、ワドワクスは天幕の入り口をまくり上げて外に出た。そこで一度立ち止まると、私に背を向けたまま言った。

「ゴルカンさん……同じことを、僕は言ってしまったんですよ、ドウィータに」

「何を？」

「二人でブレジクへ帰ろう、と」

私は黙ったまま、瓶を取り上げた。まだ十二分に酒は残っている。一口あおった。

「そのとき僕を見返した彼女の眼……あれはまぎれもなく、蔑みの眼でした。口に出しては何も言いませんでしたが、眼は雄弁でした。僕はいつも自分のことしか考えていない。その程度の男なんです。あなたのほうが……よほど、彼女を理解している」

「今日、その逆のことを、ドウィータ自身から言われたよ」

「彼女は……本音をなかなか口にしない人です。では、お休みなさい」

天幕の入り口の布が下ろされ、ワドワクスが遠ざかる足音が小さくなっていた。

私は藍火酒の瓶を見つめた。そして、残っている藍火酒をすべて一気に飲み干した。

喉が焼け付く。

そのまま寝台に仰向けになった。

結局、朝まで寝付くことはできなかった。

14

翌朝、日の出と同時に、フドーニが天幕に入ってきた。

「さあさ、仕事だよ！」

酒精が抜けきれずにぼんやりとした頭を抱えて、私は寝台に起きあがった。激しい

頭痛に、うめき声を漏らした。宿酔ふつかよいになるのは、珍しい。

「ああ、酒臭い！ これだから男つてのは！ あんた、料理くらいできるんだろ？」
「多少は」

「多少じゃ困るんだよ。百三十人分だよ。そのうち八十人分は、病人と怪我人用。ちやんと分けて作るんだからね」

「私が？」

「さあさあ、早く行った行つた！ あつちの天幕に竈がしつらえてある。フィエルつて娘がいるから、その子の言うことをお聞き。さ、早く！」

追い立てられるように、私は天幕から出された。

午前は慌ただしく過ぎた。

〈フソリテスの塔〉周辺の天幕に保護されている八十名あまりのうち、健康な者はほんの二十名たらずだった。

隣の大きな患者収容用の天幕で、ワドワクスとドウィータが、一人一人患者の健康状態を調べているのが見えた。ドウィータは、笑顔で患者たちに何ごとか声を掛けており、言われた方の患者たちも、笑いながら返していた。

私は、私に与えられた仕事に専念することにした。

まず、百三十人分の朝食を巨大な六つの鍋で作るのを手伝わされた——私はあまり役に立たなかつたが。厨房担当のフィエルは、赤い髪に碧の眼をした、十代半ばの少女だった。

私はその顔にキロエの面影を思い出してしまった。我知らず、その横顔をじつと見てしまうときがあつた。そんなときフィエルは、につこりと笑つて言うのだった。

「ゴルカンさん、手を止めてると、フドー二姐さんに怒られちゃいますよ」

聡明な少女だった。偶然にも彼女は、私の住んでいたサンナ村の出身だった。それを知ると彼女はぱつと顔を輝かせた。

「わたしの家は、村の南の金釘通りにあるんです。ゴルカンさんは、村のどの辺りに住んでるんですか？」

大鍋を巨大な柄杓でかき回しながら、フィエルは訊いた。

「村のはずれのそのまははずれだよ。北のほうの人が寄り付かない森の中だ」

「どうしてそんなところに？ 寂しくないんですか？」

「一角犬と一緒に暮らしているから、平気だよ」

「一角犬？ サンナ村にもいるんですか？ 見たいなあ」

「村に帰れたら、見せてあげよう。見た目は恐ろしいが、根は優しいやつだ」

料理ができればと、それら——健康な者には、ミツユビシカの肉の煮込みとルケ麦のパンを、病者、怪我人などには、ミドリ米の粥を——を配給する仕事が続いていた。

それが終わると、次は、病者と怪我人の看護だった。ここには、医者が一人しかいなかった。北の国から来たという老医師だった。しかも彼自身、傭い兵に槍で腹を刺された傷を負っており、患者全員の治療に回ることができなかった。

天幕には、さまざまな病を持った者たちもいた。私も多少の薬草について知っていたが、ほとんどが飲んだくれのフピースに教えてもらったものなので、かなり知識としては怪しい。それに、この辺りの茫漠とした荒地には、ほとんど薬草らしきものは生えていなかった。導術師の一人でもいれば、多少の助けになろうとは思ったが、ここには導術師も呪技遣いもいなかった。それも当然だ。彼らが大蛇の救いを必要とするはずがないのだ。

しかし私は、衛士時代に最低限の怪我の治療や応急処置を学んだことがあり、それが多少は役に立った。

気が付くと、フィエルがずっと私の後について来ていた。

「ゴルカンさんは、お医者さんなの？」

「いいや、けれど、この程度の怪我なら、なんとかできるよ。フィエル、包帯のそっちの端を持ってくれるかな」

私たちは、いつしか二人一組で患者の天幕を回って、怪我人の治療にあたった。

「ゴルカンさんは、どうして大蛇の〈蛟漿〉（しょうじょう）をもらいに来たんですか？ 見たところ、健康そうだし、強そうだし、頭も良さそう」

「大蛇に会いに来たわけじゃない。人を探しに来たんだ」

「見つかったんですか？」

「一人は。けれど、子どもが二人、行方知れずだ。おそらく水晶山に囚われている」

答えると、フィエルの顔が曇った。みるみるうちに、その碧の双眸に涙があふれた。

フィエルはしゃくり上げ始めた。

「すまない。何かつらいことを思い出させてしまったようだ」

「わたし……弟と一緒に来たんです。父さんのために」

「つらかったら、言わなくていい」

しかし、彼女はかぶりを振った。

「父さんは、鑄掛け屋をしていたんです。けれど、あるとき、溶けた鉄が父さんの脚の上にごぼれてしまつて……」

「仕事ができなくなつた？」

フィエルは、こくん、とうなずいた。

「大くちなわ様の〈蛟漿こうじょう〉を塗れば、怪我が治るつて、旅の人に聞いたんです。その人も、不老不死の〈蛟漿〉をもらうために、水晶山へ行く途中でした。だからわたしと弟のフィンクが、一緒に行くことにしたんです。でも、フィンクは……」

フィエルは、必死に嗚咽を噛み殺していた。

「わたしのせいなんです……。水晶山まであと少し、というところで、わたし、兵士に捕まつちやつたんです。大きな大人が三人もいて、わたしを茂みのほうへ引きずつて行つて……叫ぼうとしたけど、口をふさがれて……。そのとき、フィンクが兵士に突っ込んで行つたんです。父の仕事場から持ち出したんでしょう。短剣を構えてました。一人の兵士はやつつけたけど、もう一人が剣を抜いて、フィンクの胸を……」

「それ以上言わなくていい」

次の瞬間、フィエルが私の胸に飛び込んできた。顔を埋め、泣きじゃくつた。私は、彼女の小さな肩をそつと抱きしめた。私は言った。

「ここでは、みんなが何かしら傷を負っている。ここは、傷を癒すための場だろうか？ 自分一人だけで、傷を抱え込まないことだよ」

「いめんない……」

激しく嗚咽しながら、彼女は言った。

「きみが謝ることはないよ。さあ、落ち着いたら、あちらの天幕へ行こう。手を止めてると、フドー二姐さんに怒られてしまう」

私は言ううと、フィエルは気丈にも、少しだけ笑みを見せた。

天幕を一通り回り、怪我の治療と食事の配布などを済ませると、すっかり疲れ切つてしまった。私は、塔から少し離れたところに丸い岩を見つけ、その上に一人で腰を

下ろした。

水晶山——相変わらずその頂を雲が覆っている。心なしか、昨日よりもその雲は暗く、厚く見えた。不吉な色だった。

そのときだった。一頭のハイロカケトカゲが荒野の向こうから姿を見せた。カケトカゲは荒れ地を駆け抜けけると、フソリテスの塔に向かってまっすぐに走って行き、すぐに姿が見えなくなった。その背中に、ぐつたりとした人影が横たわっているように見えた。

私の脇に一つの影が落ちた。フィエルだった。二つの皿と匙を持っている。

「何だろう？ 囚われていた人が、戻ってきたのかな？」

フィエルは怪訝そうな面持ちになった。

「みんな一緒に行動していたはずだが」

「ごはん、食べてないでしょ」

フィエルは皿とルケ麦のパンを私に手渡すと、私の隣の岩に腰を下ろした。

「ああ、そうか。忙しすぎて、食べるのを忘れていたよ。ありがとう」

「ごめんね。すっかり冷めちゃった」

「いや、食事ができるだけでもありがたい」

煮込みはすっかり冷たくなっていたが、それでもこの数日間、まともなものを——酒以外に——口にしていなかったので、たいへん美味だった。ルケ麦のパンも、噛み締めるとなつかしい味がした。

「ゴルカンさん……」

やや口ごもるように、フィエルが訊いた。

「何だね？」

「ドウィータさんと……お友達だったんだね」

「友達というか……古い知り合いだよ。彼女は——ドウィータはここで、どんな評判なのかな？ ずいぶんと働きのようだが」

「ドウィータさんがいらっしやったのは、つい十日ほど前。けれど、今ではわたしたちにとつてなくてはならない存在です。朝から晩まで看護につきつきりで、しかも剣を使わせても一流。だって、十年も訓練してきたムーレグさんを試合でやつつけちゃったんだから」

「ほう、それは凄いな」

「ほんとに……憧れちゃう。そう思わない?」

「今の彼女のことをよく知らないんだ」

「ふうん……ドウィータさんは、ゴルカンさんのことをよく知ってたよ」

「話したのかい?」

「ちよつとだけ」

ドウィータが私のことを何と評していたのか気になったが、あえて何も尋ねなかった。

「ねえゴルカンさん、どうしてドウィータさんと別れたの?」

ミツユビシカの煮込みを吹き出しそうになった。

「別れた? 誰がそんなことを?」

「誰も言っていないけど……わかるよ、一目で」

「何が?」

「ゴルカンさんがドウィータさんを見る眼。ドウィータさんがゴルカンさんを見る眼

……。もう噂になり始めてるんだから。言いふらしてるのはフドーニ姐さんだけだ」

フィエルが悪戯っぽく笑った。

「馬鹿馬鹿しい。彼女には婚約者がいる」

「じゃあゴルカンさんは、ドウィータさんのことを、何とも思っていないの?」

「私は、彼女にとって仇——四年前、彼女の兄を殺したのは、この私なんだ」

フィエルが絶句した。持ち上げかけた匙を止め、じつと私の顔を凝視していた。

「嘘……」

「嘘じゃない。彼女に訊いてみるといい。私は……きみが思っているような人じゃないんだよ。私のせいで、多くの血が流された」

私は立ち上がった。

ちよつどそのとき、フドーニが駆け寄ってくるのが見えた。

「フィエル、こんなところで呑気にご飯なんか食べてる場合じゃないよ。たいへんなんだ、戻って来られたんだよ」

「どなたが?」

「どなたって、あんた、ムーゼル様だよ。あんたもトカゲを見たろう? ひどいお

怪我をなさつて……早く来て、手伝うんだよ!」

「ムージェル様が?」

「誰だね、ムージェルとは?」

私は訊いた。

「ムーレグ様の兄上です。フソリテス様のご命令で、半年前から傭い兵になりすまして水晶山へ行っていたのです」

私とフィエルは、フドーニとともに塔に向かって走り出した。

塔の前の天幕の一つに、人だかりができていた。中へ入ると、一つの寝台の上に、血まみれの男が横たわっていた。その脇に、フソリテスが立っている。ムーレグは、兄の片手をしっかりと握りしめ、寝台の横にひざまずいていた。

その瞬間に、私はムーレグの兄がもう長くないことを悟っていた。天幕に充満する匂いでわかった。死を間近にした者は、独特の不吉な死の匂いを発する。

ムージェルの怪我はひどかった。あちこちに刀傷があり、腹部からは二本、矢が突き出ている。血みどろの顔はむくみ、唇はひび割れ、両眼の焦点はすでに合っていないかった。おそらく、もう何もその眼に見えてはいないだろう。

「〈聖蛇師〉様……そ、そこに……おられますか……?」

「ああ、わしはここに、ムージェル」

「ふ、不覚にも、正体が露見してしまいました。それが、この有様です……」

「兄さん、喋るな! 傷に障る!」

「ムーレグ、おまえは……いつも優しいな。〈聖蛇師〉様……こ、これを……」

震える左手を、ムージェルは懐に入れた。そこから彼が取り出したのは、一枚の巻物のようなものだつた。おそらくは、ウロコヒツジの皮でできた紙だろう。ムーレグが、半分べそをかいたような表情で、兄から血染めの巻物を受け取り、父に手渡した。

「すぐ手当をするから、兄さんは喋っちゃ駄目だ!」

そのとき、お湯を張った洗面器と多量の綿を持って、フドーニとフィエルが天幕に入ってきた。二人は手際よく、ムージェルの上着を切り裂き、傷口の消毒を始めた。が、ムージェルは静かに行つた。

「フドーニさん、薬や包帯を無駄に使つちゃいけない。私は……もうすぐ死ぬ」

「馬鹿言うんじゃないやありませんよ!」

泣きそうな声でフドーニが叫んだ。二人とも、手当をやめようとはしなかった。フソリテスは、苦渋に満ちた表情で巻物を開いた。

「ムージェル、よくぞやってくれた。そなたを危険に巻き込んだ父を許してくれ」

「〈聖蛇師〉の長子として、当然のことを……したまです。蛇神崇拝ヘクロノムを守るのが、我らの務め……〈聖蛇師〉を継ぐ者の……使命……」

「兄さん！ もう喋るなつて！ 傷が開いてしまっ！ ああ、ヘクロンよ！ 俺が代わりに行けばよかつたんだ！」

ムーレグが悲痛な叫びを上げた。そんなムーレグに、ムージェルは顔を向けた。それは、微笑んでいるように見えた。

「ムーレグ、おまえが、父上の跡を継ぎ、〈聖蛇師〉になるんだ……よく学べよ……」

そして、ムージェルは動かなくなつた。両眼を見開いたまま。

「兄さん！」

ムーレグが兄の体にしがみつき、叫んだ。そのそばで、フソリテスは呆然と立ち尽くしていた。そして、死者に送る言葉らしき経文を静かに唱え始めた。

「ヘクロン・ヴァネ・テグロフ・エウ・ヴァネ・テグロフォ……」

不意にムーレグが顔を上げた。

「父上、なぜ……なぜ、兄者を行かせたんです？ なぜ俺じゃなかつたんです？ 〈聖

蛇師〉を継ぐ兄さんは、行くべきじゃなかつた！ 死ぬべき人じゃなかつた……！」

「では、弟のそなたなら死んでも構わんと？」

フソリテスは力無い声で問い返した。

ムーレグは何も答えなかつた。喉の奥で、ツノヤマネコのようなうなりを発するこ
としかできなかつた。

そしてフソリテスは、がっくりと肩を落としたまま、ゆっくりと歩き始めた。私の脇に来ると、静かな声で言った。

「なんと罪深き父か……なんと罪深き、血か……」

私は返す言葉を持たなかつた。

フソリテスは、そのまま天幕から外に出て行つた。

いつまでも、ムーレグの嗚咽が続いた。

翌日の正午に、ムージェルの葬儀が営まれた。場所は、塔の屋上だった。参列を許されるのは、本来「騎士」たちだけのはずであった。が、特別の計らいで、私、ワドワクス、ドウィータの三名も、列席することを許可された。

葬儀は呆気ないほど簡単なものだった。

屋上の中央に薪で井桁が組まれ、その上に真っ白な装束に包まれたムージェルの遺体が横たえられた。その胸の上には、白蛇の面が置かれていた。

「ヘクロン・ヴァネ・テグロフ・エウ・ヴァネ・テグロフオ……」

フソリテスが天幕で呟いたのと同じ文句を、蛇神崇拜者たちは唱和した。私はただ無言のまま、ムージェルの遺体を見つめていた。

ヘクロノムのために命を捨てた男。父の命で死地に赴いた男。教義を守るため、ひいては血筋を守るために殉じた男。

いつしか、経文の唱和は終わっていた。

フソリテスが合図をした。

ムーレグが、火の着いた松明をムージェルの横たわる井桁に掲げた。一瞬遅れて、炎が上がった。見る間に炎はムージェルの遺体を覆い隠し、黒い煙が青い天空に向かって上がり始めた。

肉の焦げる匂いが広がった。ワドワクスがかすかに顔をそむけるのが視界の片隅に見えた。私は、こんな匂いには慣れきっていた。何も感じない己を恥じた。

天高く登る黒煙を見上げていたフソリテスが、顔を下ろした。そして、言った。

「支払った犠牲は、あまりにも大きかった。これも、わしの逡巡がもたらした悲劇。

もはや、待つことはできん。黒白くろしろを付けるくときが来た」

一度そこで言葉を切り、フソリテスは「ヘクロンの騎士」の面々を見回した。

「これは、この地上界が誕生して以来、蛇神ヘクロンを崇める者たちにとって、最大の危機だ。蛇神崇拜全体にとつての闘いである」

フソリテスは、そこで一度大きく息を吸った。

「同時に、わしの闘いでもある。ムーレグの闘いでもある。我がフソリテス家の私怨による闘いでもある。従って、そなたたちに『わしとともに闘え』とは申さぬ。おそらく、想像を超える悲惨な闘いとなるであろう。わしは、そなたたちに『命を捨てろ』と言う資格はない。もはや、〈聖蛇師〉であろうが無意味だ。わしは、一人の人とし

て、マトスを憎悪する。そして、マトスという男を生み出した我が『血』もまた、憎悪する。わしは、今日という日に、はじめてそれを悟った。それ故、わしは、マトスを討つ」

「しかし〈聖蛇師〉様……」

一人の「騎士」が言いかけた。が、フソリテスはすぐにそれを遮った。

「この闘いを、ゆめゆめ『正と邪の戦い』と思うなかれ。〈大くちなわ様〉を利用し、多くの罪なき人々をたばかり、のみならず、多くの人々を殺し、傷つけたマトスは確かに邪であろう。ならば、そんなマトスを生み出し、それを許してきた我々もまた、邪ではないのか。我々が正義を名乗ることなどできようか？ 血のつながった息子を死に追いやったこのわしが正義を名乗れようか？ 血のつながった実の弟を討とうとするこのわしが、正義を名乗れようか？」

しわぶき一つ聞こえぬ静寂が、屋上を包み込んでいた。

「今宵、赤月が沈み闇が地上を覆ったとき、水晶山へ突入する。囚われ人は、昨夜でほぼ助け出すことができた。水晶山の中に囚われていると思しき〈抛代〉よしろの子どもたちを救うのだ。そして、〈大くちなわ様〉には再び眠りに就いていただく。そして……二度と再び、このような謀はかりごとをさせぬために、マトスの命を奪う」

屋上の誰しもが、その直截な言い方に息を呑んだ。フソリテスは、決意に満ちた表情で、騎士たちを見回した。

「ですが……」

口開いたのはドウィータだった。

「何かね、北の学舎まなびやの師よ」

全員視線がドウィータに集中した。ドウィータは、勇気を振り絞るように言った。

「伝説では、水晶山の内部は、迷宮のようになっていいます。そんな場所で、子どもたちを——それに大蛇を、見つけ出すことができるんでしょうか？」

「見よ」

フソリテスが、長衣の下から何かを取り出した。巻物だった。ムージェルが命を賭して手に入れた、血染めの巻物だった。

「これは、水晶山内部の地図。ムージェルは、おのが命を代償に、これを手に入れて

くれた。ムーゼルが半年に渡って傭い兵を装い、水晶山中を歩き回り、自身の手によって描いた地図だ。ムーゼルの血を吸うたこの地図こそが、我らの最後の希望。ムーレグが、屋上の大理石の上に泣き崩れた。他の「騎士」たちもまた、屋上にひざまずいた。私もそれにならった。冷たく、しめった風が屋上を吹き抜けて行つた。

15

日没前に、暗い雲が空を覆い始めた。雨が降り始めたのは、日が落ちて半刻ほどたつてからだつた。冷たい霧雨だつた。

フドーニに頼み、できる限り汚れていない衣服の上下を探してもらつた。今着ているものは、埃や血やその他の汚れで真っ黒になつており、穴だらけだつた。サンナ村のフピースのほうが、まだましなものを着ているだろう。

ほどなくして、彼女は焦げ茶色の装束を持って、私の天幕に戻つてきた。

「ありがとう、フドーニさん」

フドーニは、無造作に装束を寝台の上に置いた。薄い皮でできた上衣は、私が普段着ているものによく似ていた。

「礼なんかいいんだよ。それから、ほれ」

フドーニが放つて寄越したのは、錆び付いた鎖帷子だつた。ところどころ綻び、穴も空いている。

「フィエルが半日、天幕のあちこちかけずり回つてようやく探し出したんだ。ずいぶんと傷んでるが、これでもないよりはましき。文句を言うんじゃないよ」

「フドーニさん……」

「あんた、行くんだろ、〈聖蛇師〉様について、水晶山へ」

「ええ、そのつもりです」

「だったら、あんた、フィエルにだけは、ちゃんと挨拶してから行くんだよ。あの子、

『蟲囀い』で、カケトカゲの世話をしてる」

フドーニは、ふん、と鼻を鳴らすと、さつさと天幕から姿を消した。

鎖帷子を着た。こんなものを身に着けるのは、衛士時代以来だ。私には、若干大きかつたが、その役目は充分果たしてくれるだろう。その上から、新しい——とは言つ

でも誰かのお下がりであったが——装束を着た。こちらはあつらえたかのように、ぴつたりの大ききだった。

外の雨が激しくなっているようだった。天幕を叩く雨粒の音が大きくなっていた。それに、風も出てきたようだ。

剣帯を着けた。そして、ムーレグが取り返してくれた私の剣を手にした。

鞘から抜き放った。

今回の旅に出てから、いったい何人の血を吸ったのか。そしてこれから、いったい何人を斬ることになるのか。

刀身には、傷一つなかった。燭台の蝋燭の光が揺らめいている。その研ぎ澄まされた刃に、私の両眼が映っていた。自分のものとは思えなかった。いや、人のものとも思えない。いつか見た、老いて死にかけたシマオオカミの眼に似ているような気がした。

気配——

いつものように、頭よりも先に体が反応していた。

剣を構え、天幕の入り口の布を一気にまくり上げた。

短い悲鳴がした。

フィエルが立っていた。

「ゴルカンさん……」

フィエルは、燭台の光に照らされた剣を凝視していた、悪鬼にでも魅入られたかのような恐怖に張りつめた面持ちだった。

「フィエル……すまない」

私は剣を鞘に収めた。

フィエルは、一度大きく深呼吸すると、何かしらを決意したかのように、一步前へ進み出た。

「やはり、行かれるんですね」

「私の助けを待っている子がいる。それに……それに、斬らねばならん相手がいる」

「斬る……。ゴルカンさんにはじめてお会いしたとき——ああ、なんてこと、まだ昨日の朝のことなのに——ゴルカンさんは、お兄さんのように見えました。いいえ、もしもわたしにほんとうにお兄さんがいたら、こんな人であつて欲しい、つて思ったん

です」

「私はそんなに若くない。きみの親でもおかしくない歳だよ」

「そういう意味じゃないんです……」

「私はきみを失望させたんだろうか？」

「失望だなんて……ただ、今のゴルカンさんは、全然別の世界に生きてる人みたい……」

「そう……そうかも知れない。きみとは異なる世界の人なのだろう。そこでは血が流れ、人が傷つき、悶え苦しみ、うめき声を上げながら死んでいくのが日常茶飯事だ。そんな世界から逃れようと、四年のあいだ、私は隠れていた。しかし、無駄だったよ。うだ。所詮、人にはふさわしい生き場所、死に場所がある、ということだろう」

出し抜けに、フィエルが私の胸に飛び込んできた。

「死なないで下さい」

私の胸に頬を押しつけ、フィエルはかすれた声で言った。

「努力する。きみをグンに紹介したいからね」

「グン……?」

「一角犬の名だよ。グンは、よき人と悪しき人を嗅ぎ分けるのが得意だ。きみなら、すぐにグンと仲良くなれるはずだ」

フィエルが顔を上げた。

「約束ですよ」

「約束する。もう赤月が沈み始める刻限だろう。行かねば」

剣帯に鞘を刺した。天幕から外に出た。

大粒の雨のなか、いつの間にかそこには一頭の純白のカケトカゲが立っていた。すでに装鞍されている。

雨に濡れるのも構わず、フィエルは天幕から駆け出し、カケトカゲの鼻面を優しく撫でてやった。

「まだ若くて経験が乏しいカケトカゲですが、使つて下さい。名前は、フィンク……」

「きみの弟さんの名だね。ありがとう。必ず傷一つ付けずにお返しする」

私は鞍にまたがった。

「ご武運を……!」

フィエルの頬を濡らしているのが、雨なのか涙なのか、私にはわからなかった。私はうなずき、拍車を掛けた。

塔の前には、すでに十数騎のカケトカゲが集結していた。いずれも、純白のヘクロノムの長衣を着用し、顔には白蛇の面を着けていた。もしもそのとき、私がちゃんと数えていれば、そこには十五騎のカケトカゲがいたことが見て取れただろう。

そのうちの一騎が、私のほうへ歩み寄ってきた。

「そなたも、来られるか」

フソリテスだった。

「無論です。たとえばあなたの方が行かなくても、私は行きます」

「命を粗末にはならんぞ」

「そのお言葉、あなたにそのままお返しします。あなたは……死んでも構わないと思っ
ておいでだ。それはいけません。あれを見て下さい」

私は天幕のほうを指さした。

土砂降りにもかかわらず、多くの人々が、こちらを固唾を呑んで見守っている。

「あなたは多くの人たちに必要とされている。しかし、私はそうではありません。無論、犬死にするつもりは毛頭ありませんが」

フソリテスは黙ってうなずいた。

彼のカケトカゲが先頭に立った。彼は振り返り、「騎士」たちに向かって呼ばわつた。

「よくぞ、集まってくれた。この戦いは、決して歴史には残らん。そなたたちが英雄として後世に名を残すことはあるまい。多勢に無勢、我々に勝機はほとんどない。仮に勝つことがあったとしても、得る物より失う物が多い戦いになるう。それでも剣を取るという者、偽りの〈聖蛇師〉を討つために戦う者たちよ、わしに続くがよい！」
フソリテスは、カケトカゲに拍車を掛けた。一気に飛び出した彼を、十数騎が追った。私の乗ったフィンクも、遅れじと全速力で駆けた。

一行は、五百洲川沿いの細い路を北上した。霧が濃かった。降りしきる雨が、むき出しの顔面に当たって痛かった。

一刻半ほどして、霧の中に、水晶山の巨大な影が浮かび上がった。

みるみるうちに、その影は巨大化し、私たちの視界を覆い尽くした。かがり火の道は見えなかった。先日の襲撃で兵舎が焼け落ちた跡は、もはや使われていないのかも知れない。

が、小さな灯りが、岩陰に見え隠れしていた。

『第一の岩戸』だ」

誰かが叫んだ。

それを合図に、みなが一斉に剣を抜き放った。私も、自らの剣を抜いた。

第一の岩戸——水晶山内へと通ずる唯一の入り口。巨大な岩戸だった。その周辺に、いくつかがかり火が焚かれている。そして、衛兵と思しき屈強な男の姿が見て取れた。その数は、二十名は下らないであろう。まだ彼らは我々に気づいていない。

そのとき、一頭のカケトカゲが私に併走するように近づいてきた。

「ゴルカンさん、ここは二手に分かれた方が得策だと思います」

白蛇面の下から聞こえてきたのは、ワドワクスの声だった。

「ワドワクス！ どうしてここにいます？ だいいち、剣を遣えるのか？」

「剣は駄目でも、こつちのほうがありますから」

ワドワクスは頭を指さして言った。

「まずは数騎で、彼らの注意を引き付けるんです。見て下さい、連中のあの動き。とても訓練された軍隊とは思えません。まるで斥候の役を果たしてません」

「一目でよくわかるな、そんなことが」

「これでもテジンの行政武官の息子ですから、兵法も学んだことがあります。南側の岩場の少ないほうから、まず数騎が突入します。やつらは、我々の拠点が南方にあることをとうに承知しているはずですから、南側の守りを固めているでしょう」

「そのあいだに、他の者が北側に回り込み、一気に攻め込む、か。よし、あんたがフソリテス様に進言するんだ」

白蛇面の下で、ワドワクスが笑ったように感じられた。

「どうした？」

「あなたが人に『様』をつけるなんて」

「おかしいかね？」

「あなたは、自分以外の誰も信頼していない……いや、おのれすらも信じていない人

だと思っていましたから」

私は黙っていた。

ワドワクスは、カケトカゲを駆って、集団の前方へ向かった。

少しして、一団は停止した。水晶山の垂直に切り立った断崖が、眼の前二イコル(六十メートル)もないところにそびえている。

フソリテスが言った。

「陽動作戦だ。三名が、まず最初に南側から備い兵たちに攻撃を仕掛ける。おそらく、連中はかなり警戒をしているだろうが、外に出ている見張りたちは、どうやら寄せ集めの小物たちのようだ。外よりも内を固めているらしい。が、とにかく『扉』を開けて中に入らねば意味がない。先発隊の三名が見張りどもを攪乱しているあいだに、残った我々が北側に回り、一気に攻め込むのだ。先に攻撃を仕掛ける三名は、腕の立つものでなければならん。レクトー、行ってくれるな」

「はい、〈聖蛇師〉様」

一騎が前に歩み寄った。

「それから、ドウイータ」

フソリテスが言うと、騎士たちの間にざわめきが起こった。

「しかし〈聖蛇師〉様、彼女は味方ではありませんが、蛇神崇拜者では——」
誰かが言った。が、すぐにフソリテスはそれを制した。

「味方。それでよいではないか。それになにより、そなたより剣が遣える」

周囲で少し笑い声が起こった。

「そして、ゴルカン。そなたに頼む」

ワドワクスの指が私に向けられた。

私は黙ってうなずいた。

「待って下さい！ フソリテス様！」

一人の女の声が、異を唱えた。ドウイータだった。

「言い争うておる時間はないぞ、ドウイータ。さあ、行くのだ！」

「ご両人、ついて参られよ！」

レクトーと呼ばれた騎士が言った。面を着けているので顔は見えなかったが、声から判断するに、初老の騎士のようだった。彼が先頭に立ち、カケトカゲを走らせた。

続いて私、最後にドウィータが続いた。

私のフィンクの脇に、すぐにドウィータが追いついてきた。

彼女は言った。

「いったいどういうつもりなのかしら、フソリテス様は？」

「私の姿を見たくないなら、きみは下がっていてくれ。二人で充分だ」

「馬鹿にしないで」

前方に、傭い兵たちが見えた。冷たい雨に濡れ、肩を丸めて身を寄せ合い、何事か駄弁っている。その数、二十三名。おそらく、自分たちが歩哨であるという自覚すらない烏合の衆に過ぎなかった。我々にはまったく気づいていない。

その背後に、巨大な岩戸が見える。高さは約六十エーム（およそ二十メートル強）はあるだろう。峻険な漆黒の岩で作られた戸だ。一見すると、ただの岩壁にしか見えない。

「参るぞ！」

レクトーが叫び、傭い兵たちの中に突っ込んで行った。

私も続いた。

傭い兵たちは、攻撃されることをまったく予想していなかったのだろう。剣を手にしていない者すらいた。

私は剣を振るい、すぐに二人を片づけた。

わずか三人の先発隊による陽動作戦は、見事に功を奏した。レクトーとドウィータも、見事な剣さばきで、次々に敵を屠っている。傭い兵たちは、ただ闇雲に剣や槍を振り回すだけで、まったく統率が取れていなかった。

「水晶山へ！」

北側から、フソリテスの怒鳴り声が聞こえて来た。騎士たちの「おう」という鬨の声と呼応した。

十二騎のカケトカゲが、水しぶきを上げながら突進してきた。

ちょうど北側から背後を突かれた兵たちは、完全に恐慌状態に陥った。

数を白も数え終えぬうちに、傭い兵たちの大半が屠られていた。

槍を構えた太った兵を斬り捨てると、生き残った一人の兵が、甲高い悲鳴を発しながら、剣を捨てて荒野へと逃げ去ろうとしているのが見えた。兵は、長細い角笛らし

きものを、革紐で肩から下げている。私はフィンクを駆った。すぐに兵に追いついた。背後から剣を振り下ろした。革紐が切断され、角笛が地面に落ちた。驚いた兵もつんのめり、ぬかるんだ荒れ地に突つ伏した。私は鞍から跳び降りた。角笛を捨てた。兵は、恐怖に見開かれた眼で私を見上げていた。

私は剣を下げたまま、言った。

「心の臓が五つ鳴るまでのあいだに、武器を捨てて、消えろ。ならば、見逃してやる」

兵士は、「ひ」と短く声を上げると、五つどころか二つも数えぬうちに、剣を放り投げ、荒野の北方へとこけつまろびつして逃げ出して行った。私は角笛を持ってカケトカゲに乗ると、「扉」に戻った。

「第一の岩戸」の兵はすでに殲滅されていた。水晶山内部では、まだこの異変に気づいていないらしい。

数名の蛇神崇拜者が「扉」を開こうと、悪戦苦闘していた。が、巨大で頑健な岩戸は、びくともしなかった。内側から強力な門を架けられているのか、あるいは呪技か。

私は、すぐ隣の騎士に尋ねた。

「フソリテス様も開け方を存じないのか？」

騎士は、白蛇面を外した。偶然にも、それはドウィータだった。

「『フソリテス様』？ いつからあなたは人に敬意を払うことを覚えたの？」

「不思議なものだ。ついさつき、ワドワクスにも同じようなことを言われたよ」

ドウィータは、片眉を上げてみせただけだった。

「あの岩の扉、破城槌でもない限り、開きそうにないわ」

「ならば、やつらに開けさせるだけだ」

私は、角笛を口に当て、渾身の力を込めて、吹いた。

思いの外高く鋭い音が、岩戸の周辺に響き渡った。おびえた何頭かのカケトカゲが、甲高い声でいらないた。フィンクは、まったく動じることなく、おとなしく立っていた。

長い長い沈黙があった——ように感じられた。

やはり、失敗だったか、と思いかけたとき、ずん、という振動が起こった。

ゆつくりと「第一の岩戸」が、外側に開き始めた。

開くにつれて、その隙間から、青白い光が漏れ始めた。その場にいる誰もが、その

妖しく不気味な光に魅入られたように立ち尽くしていた。

「進むのだ！」

フソリテスが叫んだ。

扉はまだ、かろうじてカケトカゲ一頭が通れる程度しか開いていなかった。しかし、フソリテスの一声は、ほかの騎士たちを我に返らせた。

フソリテスの決断は正しかった。内部から新手が現れる前に、こちらから突入しなければならぬ。

フソリテスが先頭に立って走った。私のフィンクが二番手についた。

扉を開けているのは、矮小な体をした汚臭を放つ生き物だった。サルに似ているが、体に毛はほとんど生えていない。重い扉を開けるのに、二十匹あまりが必死に巨大な岩戸を押している。黄色い歯をむき出し、「しゅう、しゅう」という吐息を漏らしている。全裸で、衣服は身にまもっていない。両手、両足には黄色く鋭いかぎ爪。その背後で、二人の人の大男が鞭を振るっているのが見えた。赤い眼には知性の片鱗も伺えない。鞭打たれて動く、ただの動物だった。これが、水晶山に住む人喰い鬼か。私とフソリテスは彼らを見殺し、そのまま内部に突入した。

そこは、巨大な丸天井の広い洞窟になっていた。洞窟の岩壁全体が、ぼんやりと青白く輝いている。噂に聞いたこともあるヒカリゴケが密生しているようだ。

そして——予想通り、傭兵の軍団が待ちかまえていた。その数、およそ百。

フソリテスが鬨の声を上げた。私も我知らず、声を上げていた。背後からも、騎士たちの声。洞窟に響き渡った。

突っ込んだ。カケトカゲが傭兵を蹴散らす。鞍上から、突き出される槍を薙ぎ払う。突いた。返り血。拭う間もなく、次の敵に刃を叩き付けた。

斬っても斬っても——いくら新たな血を流しても、敵は現れた。

「右手の階段へ！」

フソリテスの怒鳴り声が聞こえた。彼は片手に血染めの地図を持っていった——彼の息子が命と引き替えに手に入れた地図。

右手には、緩やかな階段が上方へと伸びていた。その先は暗くてよく見えない。

「ゴルカン！」

呼び声が聞こえた。振り返ると、ムーレグが面を外して私を見上げていた。

「父を頼みます！ 我々は、ここで連中を阻止します」

「わかった。父上は必ずお守りする！」

ムーレグは笑みを一瞬私に向けてと、剣を上段に構えて敵の中に突っ込んでいった。すぐにその姿は、見えなくなった。

フソリテスに続き、私もフィンを階段へ向けた。駆け上がる。傭い兵たちが背後から追ってくるのがわかった。しかし、カケトカゲにかなうはずがない。

ふと眼下を見た。白衣の蛇ヘクロナミ神崇拝者たちが、傭い兵たちに囲まれている。圧倒的に不利な闘い。無理矢理、視線を外した。

私には、やらなければならないことがある。

フソリテスのあとを追った。

「ゴルカン、ついて来られたのはそなただけか？」

走りながら、フソリテスが言った。

「みな、傭い兵を食い止めるので精一杯です」

「わたしをお忘れなく」

突然の声に、はつとして振り返った。

カケトカゲを駆るドウィータがいた。もう白蛇の面は脱ぎ捨てている。少し遅れて、必死にカケトカゲの手綱に掴まっているのは、ワドワクスに相違なかった。

「すまぬ、旅のお方たちよ。我々の争いに巻き込んでしまい……」

「いえ、これは僕らの戦いでもあるんです」

そう答えたのはワドワクスだった。

「子どもたちは……よりしろ〈抛代〉にされる子どもたちはどこにいるんでしょう？」
ドウィータが尋ねた。

「地図によれば、あと五イコル（約百五十メートル）ほど登れば、右手に洞窟があるはず。『黒き回廊』とある。その奥に広い空間があるらしい。『アグロウ』と読めるが……」

……

言いかけたときだった。背後に新たな足音が聞こえた。

カケトカゲにまたがった四名の傭い兵が、いつの間にか我々を追っていた。一本の角を生やした青いカケトカゲだった。

傭い兵の一人が持っている武器を見て、私は瞬間的に叫んだ。

「フソリテス様！ 危ない」

兵が持つているのは、矢を放つ おおもみ 弩だった。引き金を引けば、矢が放たれる特殊な武器だ。昔、衛士時代に、北方のシェリンド城砦王国で使われているのを一度だけ見たことがあった。その命中精度は驚くべきものだった。

私は、手綱をさばき、フィンクを急停止させた。弩弓の兵の前に立ちふさがった。その距離、およそ二十エーム（約六メートル）。外れるはずがない。

矢が放たれた。矢は真一文字に私の左の二の腕を貫通した——熱い痛み。

「ゴルカン！」

悲鳴にも似た、ドウィータの叫び——かすかに耳朶に触れた。すぐに消える。

拍車を掛けた。フィンクが駆け出す。私は鞍から跳躍した。弩弓を手にした兵の乗ったカケトカゲに頭から突っ込んだ。兵もろとも、地面に落ちた。全身に激痛。呼吸が止まった。歯を食いしばった。剣を拾った。兵の胸に深々と突き刺した——まず一騎。

弩を拾い上げる。左腕の痛みには耐え、矢をつがえた。弩を使った経験などない。見様見真似だ。迫り来るもう一頭の黒いカケトカゲに狙いを定めた。引き金を引いた。軽い反動——同時に矢が放たれた。あやまたず、カケトカゲの両眼の間に命中した。トカゲが甲高い悲鳴を上げた。どう、と備い兵ともども地面に倒れた。落ちた兵に駆け寄った。剣で喉を掻き切った。噴き出す鮮血——二騎目。

続いて三騎目——迫ってくる。兵は巨大な戦斧を持っていた。振り下ろされた。かろうじて剣で受けた。手が痺れた。倒れた。兵の二撃目。なんとかかわした。斧では、鞍上の高さから私を狙うのは難しい。一瞬、備い兵の眼に迷いがあった——見逃さなかつた。転がった。黒いカケトカゲの腹の下。柄まで通れと剣を突き通した。なま暖かいカケトカゲの血潮が、私の顔にかかる。カケトカゲが悲鳴を上げ、大きく前脚を上げた。斧の兵が振り落とされた。立ち上がるのは私のほうが早かった。備い兵の斧を拾った。投げた。斧は回転して飛んだ。一瞬後、戦斧は備い兵の頭蓋の真ん中に突き刺さった。兵士は自分が死んだことにすら気づかなかつろう。

矢の刺さった左腕から、血とともに生気が失われていくのを感じていた。激しい眩暈と吐き気がすべての臓腑を襲っていた。視界がぐらぐらと揺れる。

あと一騎——

腕から突き出ている矢尻の部分を握った。息を止め、歯を食いしばり、折り取った。そして、もう一度息を止めた。意を決して、反対側から矢を一気に抜いた。

すさまじい激痛が、雷撃のように腕から全身へ走った。叫んだ。地面に膝を付いた。

「ゴルカン！」

ドウイータの声。眼がかすんだ。その姿ははつきりと見えない。

「来るな！ ここは私が食い止める——」

そう言いかけたとき、四騎目の兵士が私に向かって突進してくるのがわずかに見えた。剣を両手で構えた——こんなに重い剣だったか。

次の瞬間、疾風のように何かが私の脇を駆け抜けて行った。

気づくと、四人目の兵士は、腹を一文字に斬られて地面に転がっていた。

カケトカゲの鞍上のドウイータが、剣を振るって血脂を払っている。

『私が食い止める』って言った？ それとも聞き間違いだったかしら？』

「先に行って、ワドワクスと一緒にフソリテス様をお守りしろ！」

「冗談言わないで。さあ、こっちに乗って」

ドウイータが手を差し延べてきた——四年前とさして変わらぬ、華奢な腕。しかし、その腕が剣を振るい、屈強な兵士を倒している。私はあえて彼女から視線をそらせた。

「フィンク！」

呼ぶと、フィンクはすぐに私のもとへと駆けてきた。賢いカケトカゲだ。私は、傭兵の背負っていた矢筒を奪い、弩弓とともに皮の紐で肩に掛けた。ますますひどくなる痛みを無視し、フィンクの鞍の上に座った。

「強情ね。昔と変わらない」

「きみはずいぶんと変わったようだ。ワドワクスとフソリテス様は？」

「先に行ったわ。でも、その傷では……」

「運がいい。矢尻に毒は塗られていなかったようだ」

私は上衣を引き裂き、苦勞して左腕の傷の上に巻き付けた。これで当分のあいだは止血できる。そのあとは——知ったことではない。

私とドウイータは並んで駆け出した。

「見て」

ドウイータが階下を指さした。蛇神崇拝者たちと、傭兵たちの壮絶な戦闘が続い

ていた。蛇神崇拝者たちが不利だった。何人か、血で紅に染まっていた白い上衣が地面に横たわっている。階段を上がって我々を追ってくる者は、ほかにはいないようだ。

「あの人たちのためにも、先へ……」

ドウィータがつぶやくように言った。

「蛇神覚醒」第七話へつづく